

石巻市大川小学校の津波被害についての一考察



撮影：2013.12.21.

作成：2013.12.24. 瀬尾和大

石巻市大川小学校における津波からの避難行動について

大川小学校への訪問は12月21日で4回目となるが、訪問するたびに新たな疑問にぶつかっており、裏山への避難が本当に可能だったかどうかを実地検証してみようと試みた。その結果は惨めなもので、前日の雨の後ということもあったに違いないが、約50メートルの高低差でかなりの急傾斜のため、靴とズボンを泥だらけにして漸く目的を達することができた。あのとき大川小学校がどうすべきであったのかについて現時点で考えられることは以下の諸点ではなかったかと思っているところである。

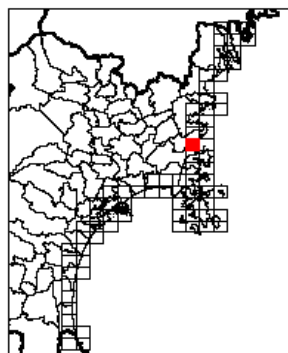
- ① まず第一に、大川小学校では津波被害についての事前対策が皆無であったらしいこと。
- ② 宮城県危機対策課は平成16年3月に 3.11地震に近い想定宮城県沖(連動)地震に対する津波浸水予測図(次ページの図)を作成し公表しているが、それによると大川小学校付近は津波浸水域からは完全に外れており、逆に避難場所に指定されている。
- ③ 地震直後に全児童は校庭に集められ待機していたとのことである。当時、校長先生が不在のため教頭先生と学年主任の数人の先生方が指導的立場におられ、近隣の住民も加わって善後策が講じられようとしていた。避難場所としては国道方面のいわゆる三角地帯と裏山が考えられたが、結果的に校庭に長時間待機していたのは上記②の予測結果が背景にあるものと推察される。
- ④ 情報収集に更なる努力が必要であったのではないかと考えられるのは、ラジオ他の通信手段による情報収集や、北上川堤防で津波を監視する等の行為が見られない点である。校庭に通学用のバスが待機していたのであれば、それを早期に活用する方法もあったであろう。
- ⑤ 問題の裏山への避難行動であるが、今回の経験で理解できたこととして、事前の予備訓練もなく、切迫性についての共通認識でもない限り、大集団での裏山避難は困難であったろうと考えられる。恐らく、事前に裏山への避難行動が想定されていれば、地権者との合意のもとで簡単な登坂用の階段と手すりくらいは準備できていたのではないかと考えられる。また、裏山の校庭側の一部には、斜面崩壊防止のためのコンクリート工事が施されているが、その擁壁に階段が設置してあれば避難活動に利用できたと考えられる。
- ⑥ 事前準備ということであれば、校舎に屋上階が設置されていなかったことも避難方法の選択肢が狭められた一因となっている。近代的な教室空間の設計に工夫が見られる反面、地域の防災拠点としての基本的な安全面への配慮が必要だったのではないかと悔やまれる。

宮城県危機対策課が宮城県沖地震(連動型)を想定して策定した津波浸水予想図

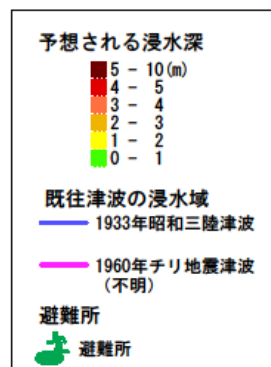
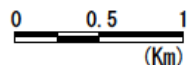
津波浸水予測図

断層：宮城県沖（連動）

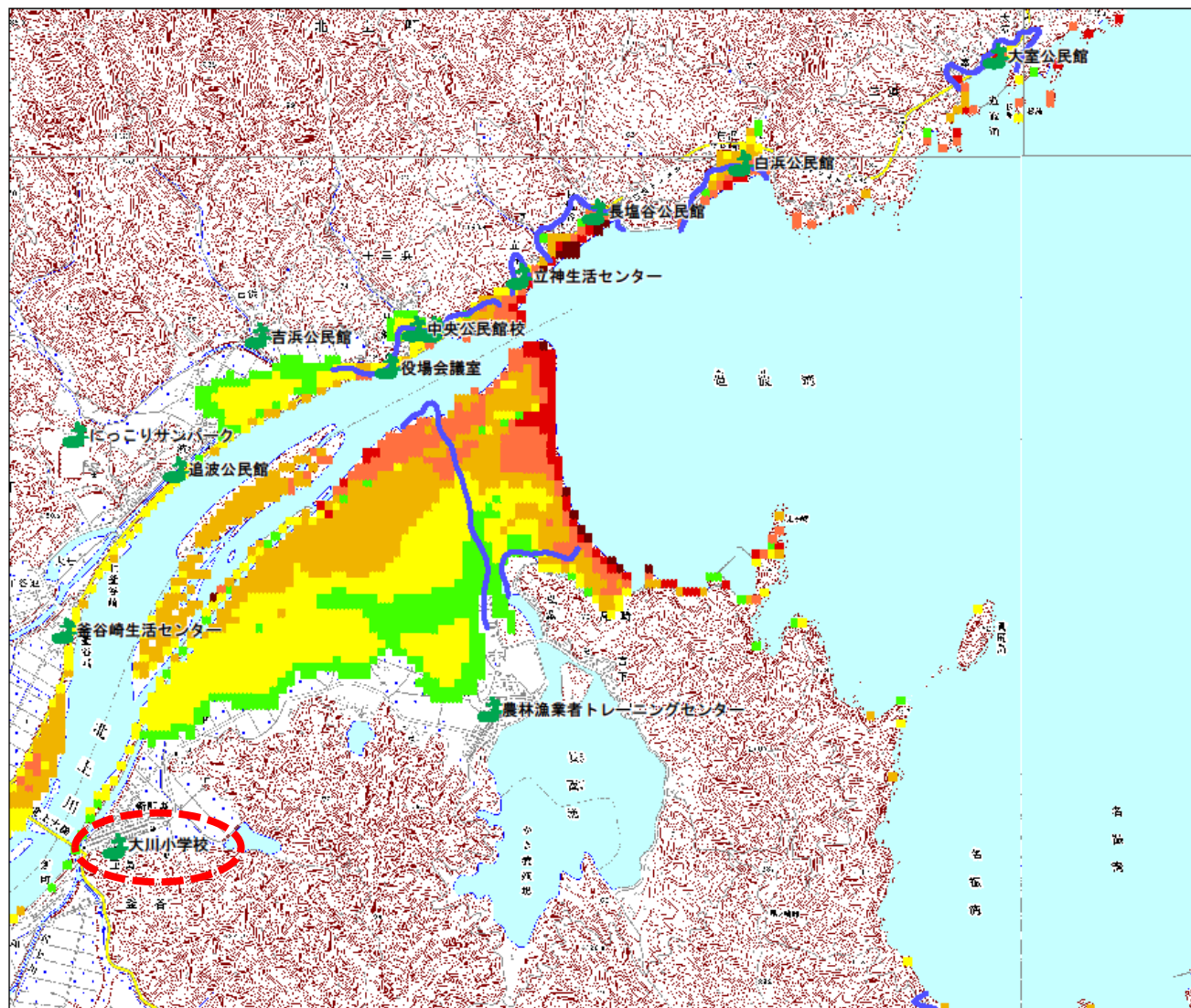
範囲：574163-4



縮尺：1/25,000

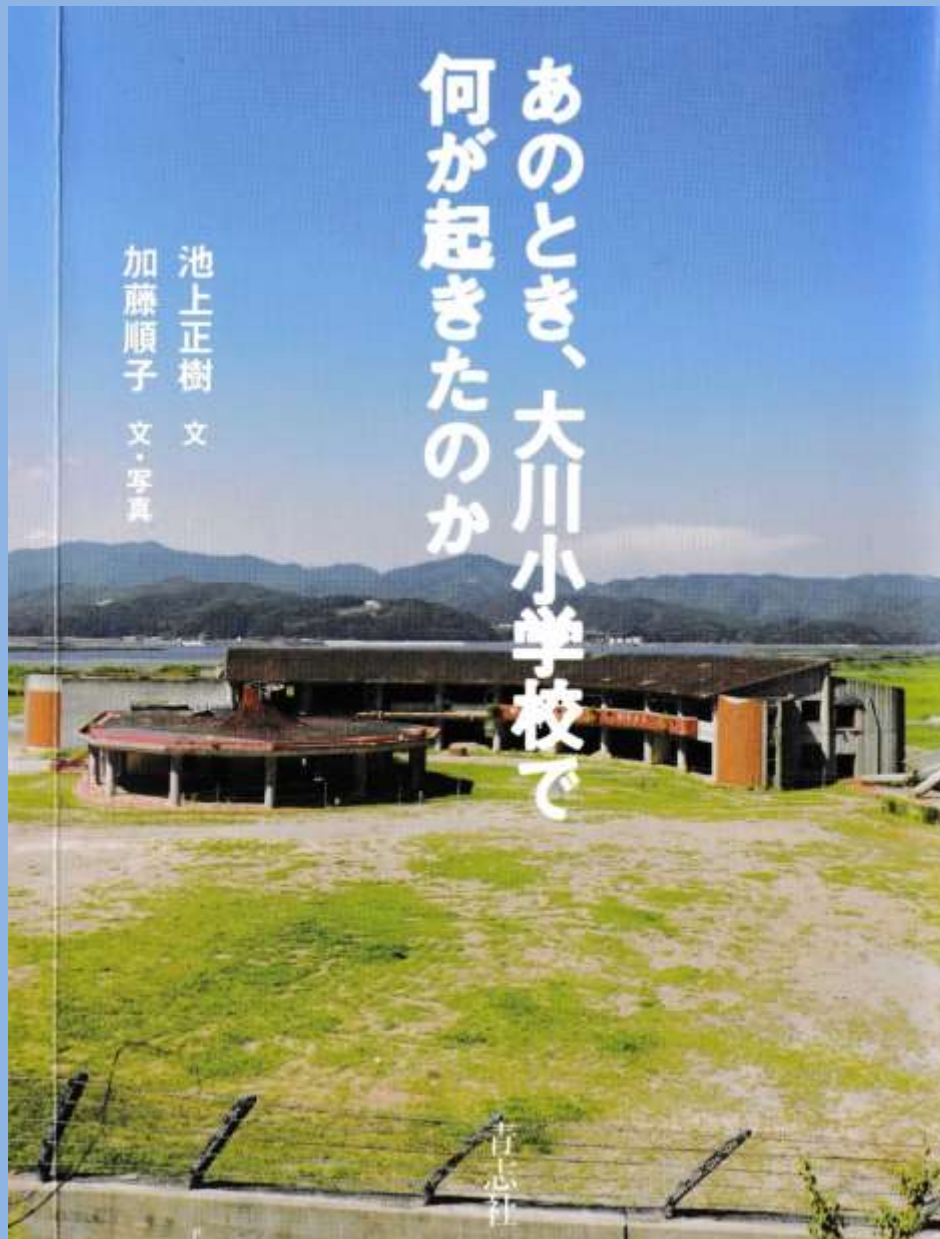


製作：宮城県総務部危機対策課



この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000（地図画像）を複製したものである。（承認番号 平15総復、第553号）

大川小学校は津波浸水予想域から外れており、しかも避難所として期待されている。[平成16年3月作成]



池上正樹・加藤順子著
『あのとき大川小学校で何が起きたのか』
青志社，2012年11月11日発行

加藤順子氏の『エピローグ』によれば，本書は2012年6月から始まったダイヤモンド-オンラインでの連載『大津波の惨事「大川小学校」～揺らぐ“真実”～』を書籍用に修正・加筆したものとこのことで，上記のサイト上での連載は今もなお継続中である。

また，本書の刊行が実現した背景には，石巻に住む報道関係や教育関係の方々から2012年になってすぐに了解を得て本格的な取材が始まったこと，そのの方々には「よその人にしかできないことだと思う」との励ましを受けたこと，ラジオ石巻や地域の市民団体，ご遺族や地域の方々が取材に協力してくださったことへの謝辞が述べられている。

文中で繰り返し述べられているのは，父兄らの願いが学校や教育委員会への責任追及ではなく，地震発生から津波襲来まで51分もの時間がありながらなぜ避難行動がとれなかったのか，真実を知りたいという一点のみであるが，本書の300ページ余を費やしても，なお真相は闇の中ということのようである。

大川小の避難

「念のためだった」

検証委 防災の不備指摘

被災は免れなかった」と学校側の対応を批判した。

この日は分析をまとめた骨子案を提示。

「学校の災害対応マニュアルは具体的に津波を想定したものでなかった」とした上で、

「大川小が指定避難場所だったことが教職員の判断に強い影響を与えたほか、災害環境の知識が不十分だったため、避難先としての裏山利用に確信を持てなかった」と指摘した。

東日本大震災の津波で宮城県石巻市立大川小の児童・教職員計八十四人が死亡、行方不明となった問題で、第三者の検証委員会は二十二日、八回目の会合を開き、震災当日の避難行動を分析した。

津波が到達直前に避難を開始したのは「切迫した危険性を感じたためではなく、念のためだった」とし、十分な防災体制が背景にあると推定した。

また教職員らによる情報収集が「受け身の姿勢」にとどまり、「避難開始の決定が遅れたため、どのような経路、手段をとっても

石巻市教育委員会の震災後の対応については「市教委の問題意識の中心は避難所運営であり、大川小の被害が他校と比べ特別に大きいことは一〜二週間過ぎて明らかになった」と経緯をまとめた。

検証委は当初、最終報告書を年内にまとめる方針だったが、詳細な分析が必要として、年明けに見送る。

ダイヤモンド・オンラインでの連載『大津波の惨事「大川小学校」～揺らぐ“真実”～』でも繰り返し紹介されていることであるが、現地では第三者による検証委員会が開催されている。上記の新聞報道(東京新聞2013.12.23.第3面)によれば、第8回目の検証委員会が開催されたのは12月22日のことで、同委員会としては最終結論を得ようとしているところのようである。上記の新聞記事から推察されるのは、大川小学校の教職員が避難開始の決定に躊躇した理由には2つあって、1つは宮城県の被害想定において小学校が津波浸水域に含まれておらず、むしろ避難場所として期待されていたこと、もう1つは避難先としての裏山利用に確信が持てなかったことではないかと考えられる。

[追記] この第8回第三者検証委員会の前日に大川小学校を訪問したのは全くの偶然であるが、「裏山への避難路の検証」が重要なキーワードになっていたことは確かであろう。

大川小学校裏山への避難路は確保できたか？



大川小学校から裏山への入口



林に入った地点から見た大川小学校
裏山への登り口 →



↑ 国道への出口



大川小学校の果樹園

← 国道への出口

津波到達点の表示板



フラットデッキ
(斜面崩壊予防のためのコンクリート工事)

